

# スタディツアーを開催しました♪

7月31日(木) マニラ着。マリガヤハウスでオリエンテーション

8月1日(金) 日本軍「慰安婦」の女性たちを支援するリラ・フィリピーナ訪問、ダバオへ移動

8月2日(土) RGS-COW(※)訪問、オリエンテーション、武内剛さんのドキュメンタリーフィルム「パドレ・プロジェクト」鑑賞後、ワークショップ、ホームステイ先へ移動

8月3日(日) ホームステイ先で過ごす。お買い物。

8月4日(月) マニラへ移動。元マニラ新聞記者・酒井義彦氏を講師に招いて会食。「日系人の歴史」

8月5日(火) 解散 (※)RGS-COW(Religious of Good Shepherd-Center for Overseas)

2025年7月31日～8月5日までJFCネットワークはスタディツアーを実施しました。今年の参加者は20名でした。

初日はマリガヤハウスでソーシャルワーカーのクリスティンさんより活動内容の説明があり、その後、JFCの2名、フィリピン人のお母さん1名のスピーチがありました。時には感極まって涙を浮かべながらのお話はとても心を打つ内容でした。



2日目はリラ・フィリピーナ(Lila Filipina)を訪問しました。この団体は、日本軍の占領下において、日本軍による性奴隷の被害を受けた慰安婦を支援しています。1990年代までに174名の被害女性が名乗りをあげたそうですが、現在、存命者は10名以下とのことでした。リラ・フィリピーナには、被害女性たちの写真や活動の記録など多くの資料が展示・保存されていました。

3日目はダバオへ移動し、RGS-COW(The Religious of the Good Shepherd -Center for Overseas Workers in Davao:カトリックダ

バオ大司教区にある非営利団体の善き牧者修道会移民労働者センター)で丸1日、プログラムを実施しました。

最初に、RGS-COWのプログラムコーディネータのフィデスさんからRGS-COWの活動紹介がありました。RGS-COWは1990年にダバオを中心にフィリピン人移民労働者支援のために設立したセンターで、2007年からJFCの権利や福祉のための活動をミッションとして掲げて活動をして下さっています。

RGS-COWは、法的支援だけでなく、JFC母子のエンパワメントのための活動にも力を入れているため、コミュニティとしての組織力があり、JFCや母親たちの横の連帯が強いです。さらに、移住女性ための権利擁護、人身取引や性被害予防などのためのアドボカシー活動の他、ジェンダー平等や人権など、自立した人として生きていくために必要なことについて学ぶセッションも定期的実施するなどJFC母子へのトータルなサポートを実践しています。



その後、JFC たちから歌の披露があり、2 人の JFC がスピーチをしました。一人は父から遺棄、もう一人は両親から遺棄されるという壮絶な経験をしていますが、大勢の前で自分のつらいストーリーを語る決意は相当なものだったと思います。それでも、勇気をもって語ることを決心してくれ、涙を流しながらの語りはとても心を打つものでした。

その後、ミリエンダ休憩をはさんで武内剛監督の映画「パドレ・プロジェクト」の上映会をしました。このフィルムは 2 歳の時に生き別れた父親を 40 歳になってからイタリアまで探しに行く武内剛さんの父親探しの旅の記録です。



この「パドレプロジェクト」に出会った時、フィリピンにいる JFC たちと一緒に観たいと思いました。上映中、涙を流しながら観ていた JFC たちが多くいましたが、その後のワークショップが多くの JFC たちにとって有意義なものになってくれたらとても嬉しいです。

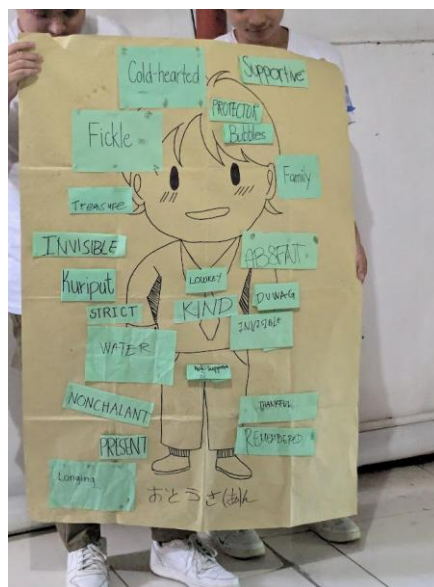
JFC や母親たちだけでなく、ツアー参加者たちも 3 つのグループに分かれて「父親像」について



ディスカッションしました。ツアー参加者たちからは「父親像」として、権威主義や家父長制といったネガティブなものが出された一方、「父親」の固定観念にとらわれず、夫婦や親子が対等な関係を築けるような価値観の変化が必要という意見などが出ていました。

JFC のグループもワークショップ中は、一人ひとり真剣に向き合い、ときには涙を流しながら自分と父親の関係や経験を語りあったそうです。

母親グループは「理想的な父親像」はとても理想的でしたが、父親としての役割、母親としての役割という枠を取っ払い、子どもの親としての役割とは何かを考えていけると心が少し楽になるのではないかと感じました。



ワークショップ後は、参加者たちは JFC 母子のホームステイ先に向かい、翌日の夕方までホームステイ先で過ごしました。

4 日目はホームステイ先から戻り、シェアリングをしました。どの参加者たちも、ホームステイ先での経験や感想を率直に語ってくださり、よい経験ができたと思います。

5 日目はダバオからマニラへ戻り、ショッピングモールで買い物をした後、元マニラ新聞の記者の酒井善彦さんから「日系人の歴史」についての講義を頂きながら会食しました。日本が貧しかった時代、多くの日本人が豊かな暮らしを求めてダバ

オに移住し、マニラ麻の栽培に従事し豊かな日系人社会を形成しました。その後、第二次世界大戦がはじまり日系人社会は一変しました。JFC 問題は戦争とリンクしており、日本政府は「JFC 問題」を私的问题と短絡的に捉えず国として救済をすべきだと酒井さんは熱く語って下さいました。

参加者たちからの声をいくつか紹介します。

多文化ソーシャルワークの視点から、すべての訪問先が有意義で、参加者間の交流もでき、良かったです。ホームステイ先で当事者からの話を聞いたこと、実際の暮らしぶりを体験できたことはこのツアーだからこそ体験できた素晴らしいものでした。

(50代女性)

30年前 JFC 家庭の現地調査に参加したときは、JFC は幼く日本人の父親捜しがメインテーマでしたが、今回は大人になった JFC の話がきけて改めて彼・彼女たちの苦悩が伝わってきました。また、エンターティナーで来日したフィリピン女性の子どもという共通項がありながら、JFC が置かれている境遇が多様で、日本政府の無策、法律の壁、家族の崩壊などが誘因となっているようです。それらの責務を負っている JFC の現状を支えている NGO の努力には頭がさがりますが、今後もますます必要となるのではないのでしょうか。

(80代女性)

スタディツアーは内容もさることながら参加者がどんな人かも重要だと思う。今回も色々な立場・色々な視点の人がいて、一つ一つを多角的に考えることができ、よかったと思う。

(60代男性)

せっかくの機会なので、普段かかわりのない参加者との交流の場がもっと持てたらと思いました。

(60代女性)

離れていてもこうして一緒に闘っている人がいるってこと何より感じました。父親と母親とは、普段考えることのない事を考えられてよかったです。(20代女性)

ホームステイ先での JFC やそのお母さんとの交流は、本や資料からだけでは学ぶことのできない様々なことを学ばせてくれたと思います。実際に当事者と話して、大変なことだけでなく好きなことややりたいことを聞くことができたのが、個人的には嬉しかったです。

(20代男性)

ホームステイでは直接その人の暮らしに踏み込ませていただき、最初はこんな暮らしをしているんだなど人の暮らしに触れることへの戸惑いなども感じながら、またその後にはこの暮らしはどのように成り立っているのだろうか、どのような関わり合いの中で成り立っているのだろうかと考えることにつながっていったと思います。

(20代女性)

マリガヤハウスと RGS-COW が当事者から信頼を得ていることを、感じました。仕事(弁護士)の中で、時々、依頼者(圧倒的に女性)の賢明さや強さに「おおっ」と驚き、彼女達の知識や経験を吸収しようと思えこれ質問してしまうことがあります。今回も、JFC 当事者や周囲の方々に対し、同様の思いを抱くことが何度かありました。「支援」という言葉は、気を付けないと、「上から目線」になってしまいがちですが(私だけ?)、実体験として、その間違いに気づかせて頂いたと思っています。

(70代女性)

JFC と括るのではなく、一人の人間として接することが大切だと感じた。JFC の体験談として父親と思っていた人が実は父親ではなかった子が、後に配布された文書の中で、その人にありがとうと言っていることに感銘を受けた。いろいろな関わり方があり、いろいろな人がいた。もっと話す機会を求めべきだったと反省している。

(70代男性)

その他、率直なご助言やご提案も頂きました。今後のスタディツアーをより良いものにしていくために、参考にしていきたいと思います。